
撤 収

井 口 邦 利

10月14日、広大な雪原の上に張られたC2に着くとさすがにほっとする。休む間もなくこのキャンプも撤収しなければならない。やはり不用な食糧を全部始末してワングャルと我々4人で全装備を背負う。通りなれた氷河の上を真昼の陽を頭上に受けて下る。途中の雪原にリエゾンのシャルマが上って来たことを知らせる名前がピッケルで書いてあった。そういえば昨日アタックの途中でC2のあたりに2名の人影が見えたのがダルマチャンドゥとシャルマだったようだ。いつもはアンザイレンする氷河も今日は身軽に駆け下りた。C1上部のガレ場をおおっていた雪も大部溶けてしまって岩くずがガラガラと足音と共にくずれ落ちてゆくように変わっている。シャルマとダルマチャンドゥの姿がテントの外に見える。テントの際を細く流れていた氷河の隔水も大部水量が増えてツエルトをおびやかしている。

13時頂度C1着、まだまだ陽も高いのでC1も撤収してしまってB・Cでゆっくりしようと、ここも今日全装備を下してしまうことにする。ここにはかなりの物資が上っているので大変な下りになると思ったが食糧を整理してしまうと意外と少ない。

ワングャルとシャルマも荷を大分待ってくれたので1回で完全におろすことができた。

この日9時半に最終キャンプを出た我々は15時前にもうB・Cに全物資と全隊員がそろうことができた。ベースキャンプも、もうあたりは黄色く色づいていっぺんに初冬の気配を感じさせるたたずまいに変わっていた。

翌日、ポーターに運ばせる荷作りをシェルパと始める。

そもそも我々のベースキャンプは羊飼いが上って来て泊る小屋とも言えないような小さく、天井の低い石室のようなところにランドシートの天井を張ってキッチンテントにし、もう一つ7-8人用の夏天が一張あるきりである。この夏天にはリエゾンオフィサーのシャルマも一緒に寝起をしていた。シェルパにもここで寝るようには言っても前のベースキャンプのときにも一度も寝たことはない。たまにトランプや酒を飲んだり、雑談をするときに入ってくるくらいだった。

こんなベースキャンプも整理されてガランとしてしまった。

大嶽とシャルマは午後からナンガールの村へポーターの手配に下って行った。つい

でに下部の岩場地帯に安全のためにフィックスをして下ることになっていた。

翌朝は、朝早くからポーターが上って来た。ヤーヤー久し振りといった感じではないかと気がいい。と思ったら早く来て背負い易くて軽いのを確保するのが本心だったようだ。村の女の子も何人が上って来た。彼女らは20kgくらいしか運ばないとのことでシェルパのワンギャルは荷分けがめんどどうになるし男連中は色々文句を言って来るのでとうとう頭に来たらしく、普段は無口でおとなしい彼を見ているとなんだかこっけいに見えて来た。それでも何とか形がついて下り始めたらナント女の子の達いことか、僕は目を丸くしてしまった。女はどこへ行っても強いらしい。

ナンガールの村には昼前に着いてしまった。もう山は全面ガスにおおわれている。いいタイミングだった。

不用なものは慈善と思ってただ同然で村へ売ったら、彼らは配けられるものは全部各家ごとに均等に分配して残ったものをセリにかけて売っていた。そしたらなんと、その分だけで僕たちの全部の売値の10倍くらいになってしまった。山奥とは言っても彼らはけっこう金持なのだ。日本に帰ったら金にも困る僕達はあっけにとられてそれをながめていた。

ポーターの費用は雇うたびに上げられていった。村の中に口の立つ男がいてけっこう愛嬌もあるし、あまり憎めない男だが、彼が主犯らしい。リエゾンも参ったらしく、とうとう男は14Rsもとられてしまった。

翌朝は朝早くから集まって来て女の子は、これ以上の装いは出来ない、と言った感じでドレスアップして来て、それで大きな荷を背負ってティロットの村へ下りて行った。彼女らは久し振りに村で買物でもするのだろう。彼らはキャラバンの時、昼食に麦のいったものを持って歩く、ときにはチルラというパンのようなものを持って来ることがある。チャンのしぼりかすで作るのだそうである。いろいろなものを彼らなりに工夫する。アタをふかして中にバターを入れたものもある。しかしいずれも我々の口にはとうていスムーズに入って行く代物ではなかった。(那須にはあったらしい)

ティロット谷のチャンドラ河との出付近は2kmほどすばらしいスラブのゴルジュ帯となっていて、その中腹に立派な歩道がコンクリートで作られている。なんだかこんな山奥にコンクリートは不釣り合いだがよく工事したものだ。動物はとても歩ける道ではないが、まったく感心させられた。

ここを抜けると目の前にパッと広げた扇状地が見え高くポプラの木が立っている田園風景のティロット村が目の下に飛び込んできた。

いよいよ山の生活もピリオドを打つところまで来てしまった。と思うと同時に安ど

の気持ちわいて来るのを感じた。

